

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：32601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830075

研究課題名(和文) 学習意欲と学力の低い子どもたちに関する事例研究 自己肯定感に着目して

研究課題名(英文) Case studies of primary school children with low motivation for learning and low academic achievement :focusing on their self-esteem

研究代表者

大塚 類 (Rui, OTSUKA)

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：20635867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学習意欲と学力が極端に低い子どもたちへの教育と支援の可能性について考察した。

子どもたちの事例研究からは、彼らが、「勉強することに何の意味があるの?」と言って授業にほとんど参加しない背景に、彼らの自己肯定感の極端な低さ(現在と未来の自分自身に対する絶望)があることが示された。子どもが抱えているこうした課題は、学習場面だけではなく、日常のあらゆる場面における周囲の人びとの関係の齟齬の中で顕在化する。したがって、子どもたちへの教育は、彼らと関わるおとながありのままの彼らをひとまず受け容れるという姿勢のもと、学習・生活・心理におよぶ包括的な支援を含んで展開すべきであることが示された。

研究成果の概要(英文)：This research attempted to explore educational and support possibilities for primary school children who rarely attend classes, children with extremely low motivation for learning and low academic achievement. Case studies of such children have shown that their low motivation for learning is intimately associated with extremely low self-esteem. The problems and difficulties these children face manifest themselves in conflicts with classmates and teachers in every aspect of their schooling lives. Their self-esteem decreases further with such negative experiences. In order to nurture their self-esteem, it is crucial that individuals who primarily have a relationship with them accept them as they are. In conclusion, there is a need to further develop education for children who have extremely low motivation for learning and low academic achievement, including support for the children's everyday lives, such as their learning, family life, and mental health.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：特別支援教育

キーワード：事例研究 質的研究 特別支援 子ども理解 教育臨床

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで、虐待などの理由から家庭で暮らせない子どもたちが生活する児童養護施設で 10 数年、そして、公立小学校で約 3 年にわたって、子どもたちの生活支援や学習支援に携わりつつ事例研究を続けてきた(日本学術振興会特別研究員 PD 研究課題「子どもたちにとっての児童養護施設——住まう場という観点から」)。これら教育現場には、器質的にも知的にも、発達上の問題や障害が認められないにもかかわらず、四則計算や漢字といった基礎学力が十分に身につけていなかったり、教室からの飛び出しや授業中にぼうっとするなど、学習意欲が極端に低い子どもたちが多く存在する。知的な遅れや障害が認められず、被虐待といった外的要因も確認されにくいからこそ、適切な教育・支援方法の確立や、教職員の加配も難しいという現状があった。

教育学の領域では、2000 年代から、シニズムやニヒリズムに裏打ちされた子どもたちの「学びからの逃走」(佐藤学 2000 『「学び」から逃走する子どもたち』)や、子どもたちの学力や学習意欲が家庭の階層的分布に強く規定されることなどについての研究の蓄積がなされている(志水宏吉編 2011 『格差をこえる学校づくり』大阪大学出版会、荻谷剛彦 2008 『学力と階層』朝日新聞出版)。しかし、こうした研究の成果が実際の教育現場に浸透し、困難を抱えている子どもたちの支援に役立っている、とはまだ言えない状況であった。こうした子どもたちをどのように理解し、どのようなアプローチで教育・支援することが有効であるのかを、子どもたちの日常生活のありよう に即して考えていくために、本研究を行なうことになった。

2. 研究の目的

こうした実践的・学術的背景のもと、本研究は、以下の 2 点を研究の目的としている。

一つ目は、教育現場においてそれぞれに異なる仕方で学びに逃避的な子どもたちの在りようを、事例として蓄積・考察し、彼らの思いや置かれている状況に即して捉えなおすことである。その際の主要な観点が、自己肯定感(self-esteem をこのように訳す)である。二つ目は、そうした捉えなおしに基づき、器質的にも知的にも発達上の問題や障害が認められず、さらには、被虐待といった外的要因も確認されにくいために、支援のエアポケットに入ってしまった子どもたち理解を少しでも深め、彼らに対する適切な教育・支援の方法を現場に還元することである。

3. 研究の方法

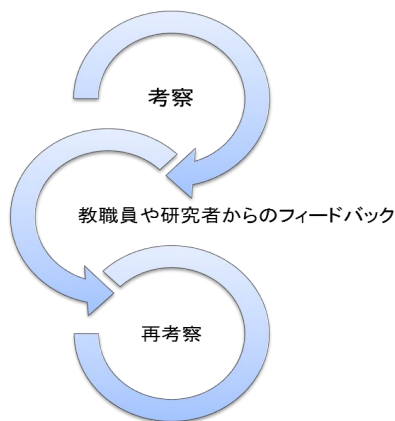
こうした目的を実現するために、本研究では、**本研究に独自の自己肯定感の概念化、教職員への聞き取り調査、子どもたちの事例研究**、の 3 つを研究の柱とした。



本研究が自己肯定感に着目するのは、研究代表者のこれまでの経験と、先行研究の知見に基づいている。すなわち、学びから逃避的な子どもたちの多くが、「どうせ自分はバカだから」という言葉を発したり、教師や他の子どもたちからの叱責や指摘に傷ついて暴力を振るうなど、彼らの自己肯定感の低さが窺えるからである。自己肯定感に関する国内外の知見と、現実の子どもたちの姿とをすり

合わせることを介して、本研究に独自の自己肯定感概念を確立する。

上述したように、本研究の目的は、学びに逃避的な子どもたちの事例の考察に基づき、子ども理解を少しでも深め、彼らに対する適切な教育・支援の方法を現場に還元することである。そのため、研究の主たる方法は、教職員への聞き取り調査と子どもたちの事例研究という質的研究になる。



本研究はいわゆる「ひとり科研」であるが、事例の考察における視点の固着化を防ぐために、別の研究課題の共同研究者に向けて研究の進捗状況と内容を定期的にプレゼンテーションし、フィードバックを得てきた。さらに、本研究が最終的に目指すのは、学力や学習意欲が低い子どもたちの自己肯定感、主体的な学び、基礎学力と学習意欲を底上げするための働きかけの方法を、具体的に提案することである。この提案は、子どもたちの現実のありように即し、かつ、施設や小学校の教職員の現場ニーズに対応したものでなければならない。そのため、教職員に対しても、研究の進捗状況と内容を定期的にプレゼンテーションし、フィードバックを得てきた。

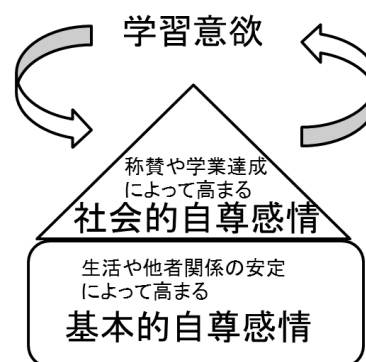
4. 研究成果

(1) 自己肯定感について

自己肯定感に関する国内外の知見を概観した結果、本研究では、自己肯定感には二種類あるとする観点を採用した（近藤卓 2010

『自尊感情と共有体験の心理学』。なお、近藤は自尊感情という語を採用しているが、以下本稿では、自己肯定感と自尊感情を同じ意味として用いる）。二種類の自己肯定感、つまり自尊感情とは、学校や家庭での生活や他者関係が安定することで高まる「基本的自尊感情」と、他者からの称賛や学業達成によって高まる「社会的自尊感情」である。図 1 で示したように、基本的自尊感情が土台となって、社会的自尊感情を支えていると考えた。教職員への聞き取り調査や、子どもたちの事例に基づく考察の結果、障害の有無にかかわらず、子どもたちの自尊感情、特に基本的自尊感情の安定や高まりと、学習意欲とが連動していることが示された。土台となる基本的自尊感情が安定しなければ、学業達成や成功体験をいくら積み重ねても、学習意欲はすぐに失われてしまう。したがって、子どもたちの学習意欲や学力の向上を目指す学習支援は、生活支援や心理的支援を含んで展開すべきであることが明らかになった（雑誌論文）。

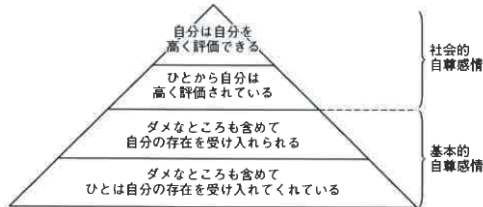
図① 学習意欲と自尊感情との連動



自己肯定感について理論と実践を往還させるなかで、自己肯定感は、自分が自分をどうしているかという従来の観点に加えて、他者が自分をどうしているかという観点から考察する必要があることがみえてきた。すなわち、子どもたちの自己肯定感の向上のためには、(1) 欠点やイヤなところのある自分自身そのものを、自分がそのまま受け容れられることに加え、(2) 他者が自分のダメな

ところも含めて受け入れてくれている、という感覚を育むことが必要になる。自己肯定感における自己と他者の役割については、以下のように図にできる（図書、p.より抜粋）。

図 10-2 自尊感情のピラミッド



では、どうしたらこれらの感覚を育むことができるのであろうか。これまでの研究の蓄積から、基本的なものも社会的なものも含め、自分に対する肯定的な感情を育むには、まず、子どもたちが、他者から受け容れられていることを実感する必要がある、と研究代表者は考えている。子どもたちが実感するような他者関係とはどのようなものかについては、本研究の今後の課題としたい。

(2) 教職員の意識と子ども支援の方法について

児童養護施設の治療指導員のインタビューからは、次のことが示された（雑誌論文）。この治療指導員は、子どもが抱えるなんらかの発達の課題は、その子どもに固有な課題ではなく、保護者や施設職員など他者との齟齬から生じていると捉えている。そのため、保護者や職員へとアプローチすることで、子どもの課題を間接的に緩和する、という方法を採用しているという。こうした枠組み、つまり、問題や課題や困難は子どもに内在しているのではなく、子どもと関わるおとなとの関係のありようのなかに外在化されているものである、という観点枠組みは、児童養護施設だけでなく、なんらかの発達の課題を抱える子どもたちとおとなと関わるすべての実践現場に敷衍できる、と考えられる。事実、まだ論文化の途中ではあるが、学校の教員や、なんらかの発達の課題を抱える子ども

をもつ保護者へのインタビューからも、教員や保護者と子どもとのあいだの齟齬が、子どもが抱えざるをえない課題の解決を遅らせるだけではなく、おとなの側の疲弊や自己肯定感の低下という悪循環を招いていることが明らかになりつつある。

学びからの逃避を典型例として、子どもが抱えざるをえない問題や課題や困難は、当の子どもに内在しているのではなく、子どもと関わるおとなとの関係のありようのなかに外在化されている。とすると、子どもを何らかのポジティブな成長へと支援するためには、彼らと関わるおとなの側の意識を変えていく必要がある。つまり、おとなの側が、子どもに対する従来の捉え方から脱し、子どもを叱ったり、子どもの成長をあきらめたりするのではなく、子どもたちが、「ダメなところも含めて、おとなは自分の存在を受け容れてくれる」とまずは思えるような関わりをする必要がある。こうした考え方は、研究代表者自身の実践と理論との往還（雑誌論文、雑誌論文、図書、図書）から導き出されたものである。

佐藤学が指摘している、子どもたちの学びからの逃走を裏打ちしているシニシズムとニヒリズムは、自分自身の現在・過去・未来、そして、他者との柔らかな関係を築くことに対する、子どもたちの絶望から来ている、と考えられる。

そうした絶望を打ち砕くためには、子どもたち自身が、自分のことを好きにならなければいけない。そして、そのためには何よりもまず、彼らと関わるおとなが、さまざまな課題や困難を抱えている子どもたちの存在を、まるごと受け容れる必要がある。ではどうしたら、子どもと関わるおとなの意識や対応をそのように変化させることができるのだろうか。その具体的な方法については、本研究の今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

大塚類「障害をもつ子どもの死に直面した母親の不安と葛藤」、『学ぶと教えるの現象学研究』、第15号、査読なし、pp.61-69、2013

大塚類「身体と感情の関係についての現象学的一考察—発達障害をよりよく理解するために—」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読なし、第4号、pp.45-58、2013

大塚類「児童養護施設における思春期の発達障害児への支援 治療指導員へのインタビューを手がかりとして」、『発達障害医学の進歩』、第25集、査読なし pp.55-58、2013

大塚類「空想の共生—子どもが母親の不在を受け容れていく歩み—」、『現代思想』、招待論文、第41巻第11号、pp.204-216、2013

大塚類・林寛平「教室に居られない子どもへの学習支援」、『青山スタンダード論集』、査読有、第9集、pp.245-260、2013

[学会発表](計 3件)

大塚類「困難を抱える子どもを理解するために」、『日本人間性心理学会第31回大会』於宇部フロンティア大学、2012年9月22日

大塚類「事例研究における現象学の可能性」、『日本人間性心理学会第31回大会』於宇部フロンティア大学、2012年9月21日

大塚類「小学校におけるグレーゾーンの子どもたち」、『共生のための障害の哲学』第4回研究会、2012年9月6日、於東京大学

[図書](計2件)

大塚類・遠藤野ゆり共編著、川崎徳子・大石英史・磯崎祐介著、『エピソード教育臨床—生きづらさを描く質的研究』、創元社、2014年4月、pp.172

遠藤野ゆり・大塚類、『あたりまえを疑え!—臨床教育学入門』、新曜社、2014年4月、pp.182

[その他]

ホームページ等

大塚類「連載 子ども理解を問い直す」『ベネッセコーポレーション child research net』
<http://www.blog.crn.or.jp/report/02/06/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

大塚 類 (Rui OTSUKA)
青山学院大学教育人間科学部・准教授
研究者番号：20635867

(2)研究分担者

なし

()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし